平成20年改訂による生活科の「理念の構造化を図った」学習指導についての一考察

福　應　謙　一
（愛知教育大学大学院　教育学研究科）

Kenichi　Fukuou
(Graduate student, University of education)

Ⅰ　研究の目的

平成20年３月、小学校学習指導要領改訂の告示がなされた。生活科にとっては平成10年に続く２回目の改訂である。

今改訂の「総説」、「改訂の経緯」において、「体力の低下」とともに、「確かな学力」の重要性が示されるところとなった。国際比較による学力の相対的低下への懸念から、いわゆる「学力重視」の方向性が出されたものと考える。

また、今改訂においては、新しく小学校５学年・６学年に「外国語活動」取り入れられ、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケ―ションを図ろうとする態度育成」[1]を図ることとなった。外国語活動の学習は、総合的な時間の学習が２単位時間になったということにとどまらずに、生活科の学習指導にも少なからず影響するものと考えられる。

さらに、総時間数において、小学校１学年で68単位時間、２年生では70単位時間の増加にとなり、国語・算数、そして体育重視によって生活科にかける時間の比率低下が懸念されるところである。そこで、小学校低学年における学びの基礎・基本は生活科にあるとの考えのもと、生活科における各単元の構想や指導の実際はどのようになされているかを明らかにすることにした。逆に、国語・算数の時間数増によって、生活科学習指導における学びの特性がより一層大切になることも考えられる。合科的・関連的な指導、他教科・領域への発展等も踏まえながら指導の実態を明らかにしていきたい。

ここで事例として取り上げる愛知県岡崎市においては先進的に生活科の趣旨を生かした学習指導を取り入れている地域である。さらに20年改訂を考慮しながら、小学校における「英語活動」を積極的に取り入れている。小学校低学年においても、英語に対して耳から慣れることを主眼において、全市的に取り組むところとなった。そうした中で、平成20年改訂以後の生活科指導の内容の変容及び充実、指導上の特色や実践上の課題などを明らかにして、改めてこれからの生活科実践の在り方を明らかにしたい。

Ⅱ　研究方法

1　対象

岡崎市教育研究所所蔵の生活科学習指導案を基にして、単元構想や指導計画、学習指導の展開内容を分析し、指導内容や指導傾向を把握する。

・平成22年度生活科学習指導案１年（６月～10月），２年（５月～11月）14校16実践

また、平成22・23年度に筆者が訪問した岡崎市内４校７実践（６月～２月）の学習指導の実際について、実態を踏まえながら指導内容や指導傾向を把握する。

2　分析の視点

平成20年改訂小学校学習指導要領解説生活編に見られる「生活科改善の基本方針」及び「改善の具体的事項」を受けた「改訂の要点」を基にして分析の視点を次の４点とした。

ア「気付き」の質的な高まりを求めるなかで、「自分のよさや可能性に気付く」や「自然の不思議さや面白さに気付く」要素が押さえられているか。

気付きについては、発足当初から生活科のキーワードとして位置づけられている。前回の改訂では、知的な気付きを深めることが求められ、今回は「自分自身への気付きに高めるよう支援」[2]が求められるところとなった。自分のよさや可能性に気付く手立てが取られているか否かを明らかにしたい。合わ

せて、対象としての自然への関心を高める手だてが取られているとともに、安全への配慮や生命の尊さを実感する指導が見られるか、について検証する。

イ　人々や社会・自然とのかかわりを意識して、「生活や出来事の交流」が図られているか。

人々や社会・自然とのかかわりの希薄化が問われるなかで、学習対象として社会や自然とかかわる設定で、そこで生活を営む人々とのかかわりが盛り込まれているか否かを明らかにする。合わせて、安全な生活や生命の尊重に触れる要素が組まれているか否かを明らかにする。

ウ　幼・保から小1・小2、そして中学年への学習を視野に入れて、円滑な接続や合科的・関連的な扱いが行われているか。

幼保小の円滑な接続による「小１プロブレム」解消を意識して、発達段階に即した発展的なカリキュラム構成がなされているかどうかを把握するとともに、学んだ内容が中学年の学習に発展する素地が考えられるか否かについて検証する。

エ　学校や地域における学習の表現方法として、地図の扱いは適切になされているか。

地図指導に関する具体的な記述は一切ないが、その学年に応じて社会事象を面的な広がりとしてとらえることは必要である。学校の校庭や生活する地域を広がりのある場としてとらえる学習が組まれているか否かについて把握したい。

Ⅲ　研究内容

上記ア～エの分析の視点に基づいて、実践状況を考察する。

《学習指導案の概要と分析》 １年実践

①　平成22年６月10日　１年「みんななかよし（16時間）―どうぶつもともだち（４時間）」Ａ小　「イ」に該当

目標に「自分の周りの人の存在に気づかせ、やさしさや温かさも感じさせたい」とある。小単元「動物も友だち」の小単元名を付けながらも、４時間構成では動物に触れる程度となる。５月「絵を描く会」でチャボを題材にしており、絵を描く場合においても、より多くの機会に動物との触れ合うようにしたい。チャボを題材にするためには、指導計画備考欄にあるように、「授業以外にも触れ合いの時間を設ける」ことが重要である。日常的な交流こそが、「教材のとらえ」にある「繰り返し触れ合いを持ち、愛着を持つ」ことで、「小さな命を大切に思う心」に発展するものと考える。図工や国語等との合科的な扱いも、構想に位置付けてスケールを大きくしたい単元である。

②　平成22年６月16日　１年「みんな　なかよし～こうえんへいこう～」（15時間）Ｂ小　「ウ・エ」に該当

「児童観」において、「子供たちの行動範囲は限られており、学校の中はまだ、行ったことのない場所ばかり・・・」と、子どもの生活空間を意識している。合わせて、「単元観」にある「保育園・幼稚園の生活との違いは大きい」ことを押さえて、幼保と小、両者のギャップを意識している。「指導観」における「手だて」として、「校内・通学路マップを作ることによって、自分の学校やその周辺に愛着を持つことができるようにする」を挙げている。幼保・小間の円滑な連携を具体的に述べていないが、活動を通して経験させることによって、自然と慣れるように設定されている。地図を多用して空間意識への配慮も見られる。

③　平成22年６月16日　１年「なつと　なかよし」（10時間）Ｂ小　「ウ」に該当

「○○となかよし」の一つとして、「なつとなかよし」が位置づけられる。子どもたちが、４月から始まる学校生活の中へ次第に溶け込んでいくものである。

子どもたちの「勉強意識」である「国語で文字を覚えることや算数ですること」をとらえ、「用具の出し入れ、トイレ・遊具の使い方」をも学習と考えて、重要な内容と位置付けて設定している。地道な積み重ねが蓄積されて、子どもたちの生きて働く力になるものと考える。

本時の学習課題「みずあそびのどうぐをつくろう」のように、活動を伴うものについては、子どもたちは、活動を通して支え合ったり、かかわり合ったりする。幼保から小学校への接続の一つと考えられる。

④　平成22年９月９日　１年「はなのおくりものをつくろう」（「たのしくあそぼう」（６時間）Ｃ小　「イ」に該当

「アサガオの花で遊ぶ楽しさに気づくこと」をねらう、アサガオの花を使って色水を作る実践である。５月から育て始めたアサガオの花が９月になっても咲き続けるのを見て、色水で絵を描いて敬老の日のプレゼントを贈るものである。教師は色水作りから始まって、絵を描くこと、プレゼントをすることまで、すべて子どもたちへの指示に基づいている。教師の計画に沿う展開である。

ただ、色水作りにおける濃さは「水の量やもむ回数が原因である」あたりに子どもなりの工夫を期待できる。「できた作品に手紙を添えておじいさんおばあさんに渡す」ことで、気持ちの交流が図られることを願いたい。

⑤ 平成22年９月16日　１年「昔遊び名人」(22時間) Ｄ小　　「ア・イ」に該当

野菜名人、おもちゃ名人など、子どもたちの周りの大人で優れた技術を持った人を名人と称することから始まって、子どもたちも体験的に学んでできるようになった子、他を指導できる子を「名人」としている。名人は、学習を会得した時の名誉ある呼び名である。

昔遊びについても同様で、祖父母や身近な人々から遊びの技を伝授された子を昔遊び名人とした。

本単元においては、昔遊びの体験に際して「人とのかかわり」を考え、友達の良さを見つけることでかかわりを位置付けている。単元の展開については、「家の人に聞いた遊びの紹介」から入って、昔遊び調べ、遊び名人と進めている。ミニ遊び名人、遊び名人と名人にも順位を設定し、「がんばりカード、チャレンジカード、よかったカード」などを用意して活動の支えとしている。周到に用意された展開となっており、指導者は、生活科の「授業名人」を感じさせる単元構成である。

⑥ 平成22年９月30日　１年「しゃぼんだまめいじんになろう」(13時間) Ｅ小　　「ア・ウ」に該当

構想文の「『僕のアサガオね、葉っぱの形がいろいろ違うんだよ』と話をする子につられ、他の子も、自分のアサガオはどうだろう、と疑問を持ち、一人の気付きが学級全体に広がる」とある。それを受けて、「友達の工夫やよさに気付く」や「自分の道具の工夫のよさに気付く」を挙げて、「気付きのよさが学級全体に広がる」ように構想している。

幼いころからシャボン玉作りに親しんできた子どもたちが、シャボン玉と出会って、より一層関心を広げ、様々な遊びを工夫する。国語で絵本の読み聞かせを行い、図工で「絵具を溶かし絵を描く」活動を取り入れている。活動を広げることで、子どもたちの意欲付けが図られて「しゃぼんだまめいじん」が育っていく。子どもたちにとって楽しい活動だけに「自信を持って発表したり、人に伝えたりする子どもたちの姿」が想像できる、整った学習指導案である。

⑦ 平成22年10月14日　１年「あきとなかよし～めざせ！しぜんめいじん」(15時間) Ｆ小　　「ア・イ」に該当

岡崎市においては「環境学習プログラム」が設けられている。本実践は、それを基にしながらも、子どもたちの生活実態に合わせて指導計画が立てられている。

身の回りの変化から秋を感じて、校庭や身近な公園に出かけている。学校の外れには広大な南公園を有し、秋の自然を十分に意識できる条件が揃う。担任教師は、観察や採集を通して秋を感じ取って、自然とのかかわりを深めるように仕組んでいる。自然の中にどっぷり浸って楽しみ、感じ取ることのできる子どもを「自然名人」として目指す子どもの姿を位置付けている。

身近な自然や自分たちの生活の中に、いろいろな秋を感じさせるものがあることに気付くことができる設定である。

⑧ 平成22年10月21日　１年「あきとなかよし」(16時間) Ｇ小　　「ア・イ」に該当

「子供たちを引きつけるのは、自然の心地よさだけでなく、思いがけない発見ができることも大きい」と考え、子どもたちの思考をとらえている。「見つけたよカード」を用意して、多くのカードを蓄積していく中で「やっぱりこれは秋のものだね」と感じると押さえている。自然の変化、季節の移り変わりを諸感覚で感じ取るのである。

それを子どもたち同士、互いに認め合い、共有することによって、「生活の中に四季折々の自然があることに喜びを感じ、生き生きと生活できる」ことを期待している。

子どもたちが学校生活に慣れて、次第に生活の範囲を広げるなかで、多くの自然事象、自然現象に出会う。日常生活に密着した深まりの感じられる単元構想となっている。

《学習指導案の概要と分析》２年実践

① 平成22年５月13日　２年「はるとなかよし―Hのしぜんたんけんたい～はる～」(13時間)
H小　　「ア」に該当

２年生になって新しい知識を身に付けたい、学んだことをできるようになりたいという子どもの意欲を自然探検に向けようと考える設定である。従前からの豊かな自然に見られる野鳥観察を続けている。「一つ気付けば・・・」他の気付きにつながることをとらえ、それを他へ「伝える」ことを考えて構想されている。

自然探検を生活科だけでなく、図書館利用の学級活動、国語の「見つけたものをしょうかいしよう」など他教科・領域との関連も考えられている。野外活動を中心としながらも、それぞれの子どもの持ち味を生かしながら、観察や取材などの多様な方法で事実を見つける手だてが取られている。地域の自然事象を的確に押さえている実践である。

② 平成22年６月３日　２年「生きものだいすき（発見！Ｉ小わくわくたんけんたい）(16時間＋随時)　Ｉ小　　「イ」に該当

１年生からの生き物探検を基盤として、２年生で「生きものだいすき」で開花する単元設定になっている。自然と触れ合う探検活動は、メダカ・トンボ等だけでなく、ササユリ・タンポポ・カラスノエンドウ等の植物にも及ぶ。自然の中の生き物すべてが生命を持っていることをつかませるように単元を仕組んでいる。一人一人がそれぞれに飼育活動をすることで、自分の生き物に対する思い入れが強まる。また、自分自身で世話をすることを通して工夫や苦労を友達に伝えたい気持ちが高まることを想定している。飼育活動を続ける中で他との接点や相違点が生じ、情報交換の必要性が高まると思われる。

ただ、グループで活動するように設定されているが、学習指導案からはその必要性は見えていない。指導の便宜上の活動形態と考えられる。グループごとに順次紹介し合うあたりからもそのように思われる。

③ 平成22年６月３日　２年「大きくなあれ」(15時間)　Ｊ小　　「ア・イ」に該当

生活科を指導する経験が浅いと思われるものの、子どもたちを何とか活動させたいという教師思いや願いを感じる。学習指導案の内容を次の３点に整理した。

○ いのち

教師は、チューリップの開花に感激する子どもたちの様子から、成長の自覚はあるものの、植物の変化や成長の経過についてはとらえていないと考えた。そこで、植物の成長に関心を持つことを、命あるものを大切にしようとする心ととらえて構想している。野菜にも「いのち」、ご飯はまさしく「いのち」そのものととらえ、子どもたちに食べていることを通して「いのち」をいただくとらえ方を指導するものである。

○ 自然の恵みに感謝

野菜作りについて活動の見通しを持って進め、収穫物をおいしく食べてもらい、喜びを感じることで自然の恵みへの感謝につなげている。家の人や祖父母、先輩からの聞き取りや図書資料活用により育てた野菜は、自分自身の成長そのものであって、いとおしく思えるものになると考えている。

○ 学級全体で共有する場を設定

４種類にわたるそれぞれの野菜が元気良く、大きく育ってほしいという子どもの願いを踏まえて、自分の野菜と友達の野菜を視覚的に比べ、意見を比べることで、気付きを深める設定である。

④ 平成22年６月16日　２年「大きくなあれ～元気にそだってね　やさいさん～」(15時間)
B小　　「ア・イ」に該当

研究発表会当日の学習指導案で、参観者に研究成果を的確に伝えるように工夫されている。

１年生でアサガオを育てた経験を基にして、２年生の野菜作りを位置付けている。野菜作りに必要な条件を、土・水・太陽に絞り、そうした自然条件が植物の成長に不可欠であって、植物の命と関連させている。

野菜を導入するに当たっては、既習のアサガオの他に、花壇片隅のそら豆の植え込み、前学年の子が植えたイチゴなど、植物の育つ環境や自然の恩恵を

視野において構想を立てている。

植物の成長に応じた長期にわたる実践として、学習意欲の持続について、次の点に留意した構想である。

・自分の世話を見直す時間を随時設定する。そして常に新たな目標を持って野菜とかかわるように配慮している。

・野菜の苗に名前、野菜自慢コーナー、野菜の成長に応じたワークシートの用意など、節目ごとに意欲の高まりを持てる手だてを講じている。

・地域の野菜作り名人の人材を有効に活用して、今必要なこと、今後の世話に必要なこと等をいつでも尋ねることができる体制づくりをしている。

さらに、子どもたちの視野を地域に広げるとするならば、身近な所における田畑の野菜作りにも目を向けて、「近くの野菜作り」を略地図に位置付ける単元内容の設定も考えられる。

⑤ 平成22年9月16日　2年「しぜんのあそびはっけん―『K小風の谷ランド』を作ろう―」(25時間　生活15＋国語4＋図工6）K小

「ア・イ・ウ」に該当

新学習指導要領に見られる「改善の方向性」を見据えた精力的な実践である。気付きの質や科学的な見方・考え方を考慮に入れて自然の風を利用したおもちゃ作りを展開している。紙飛行機やパラシュート・ブーメラン等の遊び道具と出会った子どもたちのチャレンジ精神を醸し出し、そこでの気付きを共有化して自分たちでおもちゃを作る活動意欲へつなぐという流れである。

学校の背後にはサーキット場が設けられている小高い山があり、学校の前には青木川のせせらぎのある好条件の中で風を利用したおもちゃ作りが展開されている。心地良い「K風の谷ランド」における活動は、学校の立地条件を活かした質の高い実践である。1年生からの「自然に関わる体験」の発展であり、「子どもたち自身は、科学的とは意識しないでも、何気ない科学的な気付きや基礎を見取って」と押さえる教師の構えは上学年における学習にも生きて働く素地になるものと考える。

生活科15時間に対して、国語・図工で合わせて10時間を合科的・関連的に扱い、25時間設定の大型単元となっている。国語・図工ともに学習内容によって合科としたり、関連としたりして相乗効果をねらっている。聞く活動や話す活動では家の人や近所のお年寄り、他学年の友達や1年生等を取り込んで人々とのかかわりを押さえている。作ることにおいては図工、書く、話す、聞くことにおいては国語の学習と合科的に進められている。

⑥ 平成22年9月30日　2年「町　大すき！　ぼくら　町のきらりたんけんたい」(30時間)

L小　　「イ・エ」に該当

30時間という多くの時間を使い、繰り返し探検活動を設定している。学級全体では通学路に従い3方向に分かれて3回にわたり各2時間かけて出かけている。また、少人数のグループに分かれて「一つの場所について詳しく調べる町探検」を行っている。探検隊の名前を付けて意欲付けを図り、「きらり」と光るものを調べて発表することにより、「調べて場所がより好きになるだろう」と考えて構想されている。それは、自分たちの住む町への関心・意欲から愛着となって子どもたちの心に定着するものと思われる。

子どもたちの「普段行かない場所」に出かけることで活動範囲を広げるように考えられている。消防署や交番などの公共施設、地域に根付いた店舗・ショッピングセンターなど広範囲である。何回も探検をして「場所や物、人の魅力に気付かせたい」としている。新たな施設・設備を知ることでより一層親しみを覚えるものと思われる。ただ、子どもたちが既に行った店舗や施設の経験が構想に反映されていない点は気になるところである。

本時においては、教室の中央に広げられた大きな学区の地図（教師準備）を囲みながら、「お気に入り『きらりスポット』を教え合おう！」とする展開は興味を引きつける。準備されている「目印の旗、場所・物・人のカード、五感マーク」を使って紹介し合う展開で、子どもたちの関心は学区全体に広がるものと思われる。およその位置関係・方向感覚を押さえた探検で子どもたちの意欲は高まるものと考える。

⑦ 平成22年11月4日　2年「M学くではたらく人たちをたずねよう―『町大すき』―」(32時間）M小　　「ア・イ」に該当

新学習指導要領の主旨を踏まえ、地域の人々との

ふれあい、気付く場の設定、伝え合わせる機会の位置付けなど、周到に準備されている。町探検の活動内容においても、１学期に好きな場所、よく知っている場所等、「場所」に限定して話を聞く機会を設けている。本実践の２学期には探検先を６か所に絞って、そこで働く人や建物に着目させている。探検内容を限定することによって、子どもたちの意識を集中させるように仕向けている。その意図は明確であるが、子どもの興味・関心や意識・意欲の持続について考慮されていない。気付かせることをねらいとして、32 時間という多くの時間をかけて進める町探検である。

学習過程については、教師の意図に従って進めるように準備されている。予測される活動としての質問の仕方、発表の仕方など練習することで内容の質の向上を目指している。練習効果で自信を持って進められると思うものの、子どもたちの意欲の高まりや内容の充実が損なわれるものと考える。生活科の教科の特性を考えると、ハラハラ・ドキドキ・ワクワクした気持ちの高まりが欠如していると思われる。単元構想で教師が想定しながらも、子どもの思いに委ねる柔軟性がほしい。

⑧　平成 22 年 11 月 11 日　２年「Ｎの町大すき」(27 時間) Ｎ小　「ア・イ・ウ」に該当

11 月は、学校生活に慣れて、友達との交流も活発になってきており、町探検に相応しい時期である。学区のことをもっと知りたい子どもたちの要望を踏まえて身近な地域の探検に出かけている。春の探検では、安全上のこともあって、学級全体で出かけたが、秋探検では子どもたちの関心に応じてグループ構成で出かけている。手打ちうどん店・パン屋・提灯屋を始め、交番や電車駅をも見学地に入れて多彩である。調べたことの発表に際しては、ワークショップ形式を取り入れて一人一人が活躍できるように場を設定している。

学区内においては、子どもたちの興味を引きつける施設や店舗が多く、地域の特性を生かした多様な内容を盛り込むことができている。活動に際しては、町探検から発表会まで同じ班員構成で行い、「友達のよさに気付ける」ように配慮されている。発表方法をグループで考え、紙芝居を始めとした様々な工夫がされている。

ただ、それぞれの施設・店舗等の地域的な広がりや位置関係が押さえられていないのは残念である。

27 時間という長期にわたる意欲的な実践である。見学からまとめ・発表まで子どもの思いを大切にしている。安全面の配慮もなされ、要所、要所では保護者の協力も得て、安心して見学ができるようになっている。最後は「お礼の手紙」で気持ちを表すとともに、自分たちが住んでいる「Ｎ学区への親しみ」を謝意で表現している。

《授業研究校学習指導案の概要と分析》

22, 23 年度授業研究で筆者が訪問した岡崎市内の学校について、授業の一端を述べる。ここでは紙面の都合で、Ｓ小とＴ小の各２事例を取り上げる。

○Ｓ小　平成 23 年１月 27 日実践

・１年「できるようになったよ　もうすぐ２年生」(18 時間)　「ア・イ・ウ」に該当

進級することは、子どもたちにとって大きな成長の喜びである。１年入学当初に比べると、心身とも成長を自覚できることは多くある。できることの積み重ねが自信・安心となって、進級意識を高めていく。そのような子どもの様子や実態を踏まえて教材を設定する。学習指導案に見られる「できるようになったよ発表会」や保育園・幼稚園児を招いての「ようこそＳ小へ」といった交流会の催しとなる。自分より年下の子どもが位置付くことで、自信を持って２年生に進むことになる。

本学習指導案は具体的な体験や活動が基盤となっている。具体的な体験によって、具体的な比較が可能になり、具体的な指導を生み出していく。

「１年間をふりかえろう」は、単元の始まりである。①できるようになったこと、②がんばり見つけの二つによって自分自身の自覚だけではなく、友達や家の人からも認めてもらって成長を確かなものにしていく。２月初めの保護者参観日も構想に入れた成長単元である。多くの人に支えられ、友達と支え合って２年生に進級する子どもたちである。

子どもたちにとって、自分自身の成長をとらえることは難しい。身長・体重はもちろんのこと、手形・足形、絵や作文の一つ一つが成長の証として具体的実績となって積み重なっていく。１年生のこの時期

の学習は、入学当初から先を見越して準備しておいて成り立つ。蓄積された学習記録や作品を整理し直してファイルにまとめることで、成長の自覚が促されていく。教師の支援はそこにある。

参観した授業において、子どもたちは元気のある溌剌とした声で「前は○○だったけど、今は○○になりました」という発言が随所に見られた。話型を用いたものであるが、それは授業の後半に進むにつれて次第に、できるようになった今に重きを置く発言に変わっていった。子どもの伝えたい気持ちの表れと思われる。教師はそれをその場において実演に結びつけたり、今後の伝える場につないだりした。子どもの思いの高まりをどう次への活動に発展させるか、授業の進展を読みながら行われる名人技と見た。

○S小　平成23年6月9日実践

・2年「大きくなあれ～げんきにそだってね やさいさん～」(15時間)

「ア・イ・ウ」に該当

動植物の飼育・栽培における栽培活動を取り上げる事例である。

植物栽培において、植物の生命や成長時における自然の恵みに気付くことを通して、根気良く育てる自分の成長について気付かせるものである。この時期の子どもたちは、1年生から進級したばかりで、2年生になった喜びや活気に満ちている。その成長の具体的な姿を自分自身の中に見出すものである。

学習指導案を構成する目標・構想・本時に分けて、次に示す記載項目に従って分析する。

◇目標

・「2年生」に上がった、わくわくした気持ち

・できるようになった自分自身の成長への気付き

◇構想

・野菜の選定、6種類から

・野菜の成長の変化への気付き、問題点の共有

・世話を根気よくしてきた自分の成長への気付き

◇本時

・食害や病害の把握状況

・観察記録の相互交流

・継続観察から問題意識への切実感

まず、目標においては生命や成長、感謝等をキーワードとして、野菜を育てた「自分に気付く」ことをねらっている。その基盤としては、やはり「2年生」に上がったワクワクした気持ちであろう。進級による意気込みが活力となって単元の追究を貫いている。

次に構想においては、体験活動を中核にして、相互の比較や指標の提示等についても、具体性を持たせるようにしている。低学年の子どもゆえに視覚を通して気付く感覚を育成するように配慮している。植物の成長を「葉の数を数えたり、長さや太さを物差しで測る」等、諸感覚を使って気付く感覚を磨くものである。

また、本時においては、「野菜の育て方の問題」について意見交換を行う。児童一人一人がそれぞれに育ててきた野菜を身近において、栽培上の課題を出し合う。虫の食害、葉の病気による異常などを、時にはマイクロスコープで写して細かいところまで具体的にとらえるようにしている。さらに分からないことは、野菜の先生の登場へとつなぐ。これまで、自分の野菜としてかわいがって愛着を感じていることを前提にして、さらに切実な問題意識を持つようにする設定である。

授業を参観して、それぞれの育てている野菜への思い入れは相当深いものがあるように感じた。その野菜を身近に置くことによって一層強く感じられた。本時は、野菜栽培上の課題を共有し、相互に解決を図るものであった。子どもたちが育てている野菜の多くは管理が行き届いており、生育上の問題が感じられなかった。虫や病気を防ぎ、十分に育っていたことで課題意識が薄いように思われた。それでも、教師は機器を活用して、細部に絞って観察させることで、問題の早期解決の手立てを講じた。それによって、ゲストティチャーを呼び込むことにつなげた。

本単元においては、教師は「子どもが野菜を育てる」教材の価値や意義をよく把握して、15時間の計画を立てた。初めの、野菜への気付きを持つところから、相互に高め合う段階を経て、終末段階では、野菜の種に注目することで、「生命のつながり」まで発展させている。

○T小　平成23年7月14日実践

・1年「みんななかよし」(30時間)

「ア・イ・ウ」に該当

1学期末の7月になり、不安から安心、そして自信を思って生活できるようになってきた子どもたちをとらえて「みんななかよし」単元を設定している。担任教師の得意な音楽を取り込んだ合科的・関連的な生活科を構想したものである。生活科を中心において、片方に音楽、もう一方に国語・図工・道徳等を関連させて、内容的にも、質的にも充実した計画を立てた。

単元を構想するにあたって、学習指導要領からこれまでの生活科の改善点を押さえ、具体的な改善の方向を踏まえた。それを受けて「あさがおのけんこうかんさつ」を基にして朝顔の様子や朝顔への思いを自分の言葉で書き、「あさがおソング」を作ろう、という大テーマを掲げている。子どもの活動主体は朝顔を育てることである。その活動を通して感じたこと、気付いたことを「あさがおソング」とするものである。

本時における学習課題は「今のあさがおの様子や、自分の気持ちを表す歌をつくろう」であった。授業参観者から、授業協議会において、諸感覚を研ぎ澄ますことが「あさがおソング」になっていること、日頃の学習の積み重ねによって、子どもたちが感じたことをのびのびと歌に表現していることが指摘された。一人一人が朝顔とのかかわりを深く持ってきた結果という結論であった。

○T小　平成22年11月26日実践

・2年「Tの町大すき」(36時間)

「ア・イ・ウ」に該当

2年秋の町探検実践である。豊かな自然に恵まれた子どもたちが町探検に出かけて、水生昆虫の生息、ブドウ栽培、住宅団地、歴史的文化財等に接して、自分たちの生活する地域への愛着を深める内容である。

36時間というスケールの大きさで、まとめは紙芝居や地図作りであり、それを他学年に伝えて広めることで、「多くの人と気持ちを共有するよさを感じさせたい」としている。

子どもたちは、「お気に入りの場所を紹介」するところから入って探検に出かけている。デジタルカメラ・記録カードを持参して情報を共有できるような手立てが取られている。教師は、子どもたちが探検に出かけることで、働いている人や地域の人々と接することを想定に入れている。子どもたちを取り巻く周囲の人々との接触は、子どもの世界が大きく広がることになる。その事前の準備があっての地域へのつながりである。

本実践全体を通して見ると、二つのことが課題として挙げられる。一つは、文化財や由緒ある行事について追究を深めるあまりに、難しい内容に入り過ぎて子どもたちの関心が離れてしまうのではないかという危惧である。中学年以後の社会科の学習内容とも思われる。また、今一つはこれだけの活動の広がりの見られる内容でありながら、安全上の配慮事項が記載されていないことである。探検活動にあたっては、担任教師のみでなく他の教師、地域の人、保護者等の協力が不可欠である。

ただ、単元全体に、子どもたちを地域の社会的諸事象に触れさせたいという教師の意図は十分に感じられる。学区の地図を活用して学習事項を押さえさせたり、学習のまとめに地図を活用したりしている点は評価できる。

Ⅳ　研究のまとめ

全部で20学習指導案とその授業実践を取り上げた。平成22・23年度の一時期の生活科学習指導ではあるが、学習指導要領の主旨が定着しつつある中で、実践上の傾向が出ていると感じた。最初に示した4つの分析の視点にしたがって実践の傾向をまとめる。

ア「気付き」の質的な高まりを求めるなかで、「自分のよさや可能性に気付く」や「自然の不思議さや面白さに気付く」要素が押さえられているか。

生活科におけるキーワード「気付き」については、よりいっそう質的な高まりが求められるようになってきた。今改訂後の実践においても、各学習指導案「単元目標」で「気付くことができる」「気付いたりする」を掲げている。対象への気付きとともに、自分自身の変化、自分の頑張り、自分のよさに気付くことを目指している。ただ、本時の目標においては、「友達のよさに気付く、楽しさに気付く、違いに気付く」程度にとどまっており、自分自身への気付きまで目指しているものは少ない。つまり、一時間一時間というより、単元全体を通して自分自身への気付きに至るものと考えられる。

気付きについて特筆できるのはＳ小の実践である。「気付く力」を単元においても、本時においても必ず位置付けており、単元を通して次第に気付きが変容して、対象への気付きから自分自身への気付きへ高め、伸ばすように設定されている。２年野菜作りにおいて、美味しい野菜が育つように、栽培方法を図鑑で調べたり、野菜名人に聴いたりして世話や観察をする。自分の野菜の成長を見守ることで、「野菜の命について気付く価値ある教材」ととらえている。気付きの質的な高まりを追究する学習指導案は、単元構想に深まりがある。

また、自然の不思議さ、面白さについては、植物の成長に魅力を感じたり、自然環境の変化を楽しんだりすることを通して学びとっているように思われる。自然への積極的な働きかけによって享受できる内容である。岡崎市においては環境に関する学習指導に重点を置いており、市全体や学校独自において環境プログラムが作成されている。各学校での学年の発達段階を押さえた取り組みが望まれるところである。Ｓ小においては生活科・総合的な学習の両面で各学年ごとの年間指導計画が立てられている。

生き物を対象とした場合でも同様で、長く継続的な飼育・観察を行わないと、不思議さ・面白さを感じるまでに至らない。世話を続けることによって対象に対して愛着を持ち続け、自然の不思議さを感じ取る域に達するものと考える。

イ　人々や社会・自然とのかかわりを意識して、「生活や出来事の交流」が図られているか。

対象とのかかわりは、今改訂により密接に関わるように求められている。取り上げた 20 学習指導案中、16 において社会・自然・人々のうち、いずれか、または二つないしは三つとのかかわりが持たれている。社会や自然との背景には必ず人々があり、人とのかかわりで社会や自然とのかかわりに深まりが出るように感じた。

とりわけ植物とのかかわり、人々とのかかわりは比較的多く取り上げられている。草花や野菜を育てるということ、町探検でも人々との出会い等、対象とかかわる授業作りがなされている。Ｄ小の「昔遊び名人」の実践では、遊び道具作りを通して必然的に他とのかかわるように設定されている。子どもを取り巻く周囲の大人は昔遊びについて精通しており、親切に教えてもらえる。また友達同士の助け合い、競い合いは学習の面白さにもなって、友人としてのかかわりも深くなる。学習活動を通してかかわりを深める交流が見られる。

これらのかかわりから生じる生命や安全面に関する内容を丁寧に取り上げている例は少ない。教師としては、けがや事故の内容に安全には配慮しているものの具体的には記さない。しかし、危険面の想定して単元を考えるかどうかによって急遽の対応は異なる。学習活動の中で、子どもの安全面について考えることができるように構想に位置付けたい。

植物や動物を育てることにおいて、命あるものとして取り扱うものの、深く追究する事例は少ない。これは、追究対象として生き物を育てる学習が敬遠されがちになってきている結果として考えられる。今日的な少子化の時代だからこそ取り上げたい内容である。

ウ　幼・保から小1・小2、そして中学年への学習を視野に入れて、円滑な接続や合科的・関連的な扱いが行われているか。

幼稚園・保育園から小学校への円滑な接続が求められているものの、前面に出して指導計画を立てている例は少ない。小学校において、それほど危機意識を抱いていないのであろうか。中には「保育園・幼稚園との生活の違い、園では最年長だったのが小学校では最年少、幼児から学童への移行の時期、遊びから学習の基礎作り」という的確なとらえをして構想している学習指導案も見られる。

他の多くは、1 学期実践の中で新１年生の実態として、教室から出ない子ども、限られた行動範囲、初めての経験から興奮気味の様子等としてとらえ、単元構想に生かしている例は見られる。また、1 年生の子どもたち自身の意識の中に、学校は「国語で字を覚えること、算数で計算すること」ととらえて、「用具の出し入れ、遊具の使い方」も学習の基礎と考えて子どもたちに対応する学習指導案も見られた。その意識のギャップを踏まえて指導するかどうかで、子どもが背負う１年生での負担が異なるものと考える。

生活科との合科的・関連的な扱いについては、国語や図画工作との間において指導事例が見られた。

特に生活科の活動と国語との関連は、言語活動の充実と相まってしばしば取り上げられている。学習記録をまとめる書く活動、調べたことを発表する話す活動等、生活科から国語へ、国語から生活科へと相互に結び付けて効果的に展開する例が見られた。

画期的な事例は、T小１年生実践で音楽との合科的・関連的な扱いであった。朝顔観察の変化を歌として曲に合わせて表現するものである。担任教師は、「生活科を軸に、音楽と国語を加味した合科的な学習を試みた」として、学習指導要領を読み込み、小１という学年の発達を押さえた指導である。各教科の特性を押さえた周到に用意された指導事例と見た。

合科的・関連的な指導を意識して単元を構成するか否かによって、単元のスケールが大きく異なるものと思われる。各教科・領域の目標を踏まえて、相互関連的に扱うことによって相乗効果を期待できる。とりわけ、小学校低学年における学びの基礎・基本は生活科指導にあるという考えに立つと、より一層その重要性は増す。今日的な「小１プロブレム」への対応を考える必要性も自ずと明らかになる。

エ　学校や地域における学習の表現方法として、地図の扱いは適切になされているか。

地図の扱いを前面に出して学習指導案を組んだ実践は３事例に過ぎない。

B小１年生において、校内・通学路マップを作ることにおいて「たんけんマップをかんせいさせよう」として扱い、探検で見つけた事象を地図上に記載して地図を完成させた実践が見られた。探検で見かけた「犬の散歩のおばさん」また緑道や遊具など、子どもたちの関心事が絵地図として出来上がる。観察事象が増える面白さと合わせて、出かけてみたい関心のある場所として子どもたちの間に広がっていく。これは、教師の押さえたい「自分の学校やその周辺に愛着」を持つようになっていくものと考える。多くの要素、様々な事がらが記載されることで、子どもたちにとってまとめる喜びとなるとして活用している事例である。

L小２年生実践は、学区探検の際に地図を活用するものである。探検する好きな場所を地図上に記入する作業が伴う。この場合、地図は，発表する場所を提示する手段として用いられている。地図に記入した場所はどのあたりか、学区の広がりの中で示すものである。「歴史ある寺院、消防署、交番」等多くの子どもの周知する施設から、「ケーキ屋、肉屋魚屋」等買い物で知っている店まで幅広い。教師は地図に載せるにあたり「写真と共にお気に入りの理由」を付記するように課している。教え合うことで「知らない所にも、どんな場所なのか行ってみたい」行動につながるように考えられている。地図の表記は他の施設・設備や諸事象との位置関係・距離感を表現することは難しいが、平面の中に多くの内容を示すことができることに意味がある。

小学校１・２年生の段階では、空間的な広がりを意識して事象をとらえることが大切であると思われる。子どもたちの意識においてはないものの、教師の押さえとして広がりを持った諸事象として心に留めておきたい。こうした地図に関する学習の基礎は、やがて３年生以上の社会科学習等への発展を見越して、多少なりとも考えを展開したい学習事項と考える。

今改訂によって、生活科の指導内容の大きな変化は見られない。以前のように生活科授業研究への取り組みは減ったものの、生活科の広まりによって生活科指導において子どもたちに付けたい力が明確になってきている。学校ごとの年間計画に基づき、子どもの実態や担任教師の経験によって少しずつ見直して実践されている。今後も、単元構想や授業展開の仕方の変容について継続的に見続けていく必要がある。

【引用・参考文献】

1)　文部科学省「小学校学習指導要領」平成20年７月　107頁
2)　野田敦敬編「小学校学習指導要領の解説と展開生活編」2008年　教育出版　17頁

《参考にした主な学習指導案一覧》

＊文中に示したものは除く

○　平成22年11月８日　２年「かんしゃパーティーをひらこう」（８時間）U小
○　平成23年12月５日　１年「おしえてあげるね、たのしいあき」（６時間）V小
○　平成23年12月５日　２年「Vのすてき見つけた～町たんけん編」(20時間）V小